

## もひとつなつやすみ

ちよつと、顔を上げてみた。

土の匂いの向こうに、高い空が広がってるよ。

別に、何か気になった、ってわけでもないんだけどさ。ただ、ちよつと空が見たくなっただけ。

「3日、かぁ」

莉奈あたりに言ったら熱でもはかられそうだけだね。ま、あたしにだって、こんな日も

「ちよ、ちよつとなぎささ!! まえ、まえ見てって!」

あん? なにながなってんのよ。まえがどうしええっ!!?

目の前いつぱいに、白いものが!?

ゴーン!!

痛ったーっ!!

「こーらっ!どご見てんのよ。練習中でしょうが、

キープテンっ!!」

あー、ほんと痛い。おでこにコブできてるよ。目もまだちよつと開けられないし　っつーか、

「休憩時間ですよ、今はさぁ」

目、こすりながらゆっくり開けてったら、ぼかんとした顔がそこら中にあつた。みんなしてクロス構えて、パス練習の格好のままどこち見てるあれ?

ばふっ

こんどは目の前が編み目もよう。クロスで顔なでてるんだ。

こーいうことするのは

「練習再開していい? って訊いたらうなずいたの、なぎさでしょうが。しっかりしなさいよ、キープテン?」

やつぱ莉奈だ。その後ろに志穂が、かくれる感じでついてきてる。

### 3 もひとつなつやすみ

あたしはラクロス部のみんなに手振って、練習続けさせた。ボールがクロスの間を行ったり来たりしてるの、なんか遠くのことみたいに見えるな。

「ごめんごめんごめん」。そんなショック受けるなんて、思わなくてさあ」

志穂の声といっしょに、ぱつと目の前の風景が変わった。ああ、いたんだっけ、そういえば。

「志穂？とりあえず、さっきの話はこれ以上言わないこと！いいね？」

そうそう、莉奈もいたんだ。いまさっきクロスでなでられたばつかなのに、どうかしてるよ、あたし

「そだね、莉奈。他のみんなには、もちよっと調べてから話そ」

なにか言いながら、じつと志穂があたし見つめてた。別に、いいけどぞ。

\*\*\*\*\*

ぼくとしながら着替えて、あたしは教室に向かった。まいったなあ。こんなときに、カバン忘れてきちゃうなんてさ。

「にしても」

休み明けまでに宿題も終わったし、秋に向けてがんばるぞっ！　　ってときはすなのに、ぜーんぜんその気にならないや。

ラクロス部のみんなからは、帰って寝てる、なんて言われるし。はあ、これじゃキャプテンじゃないよなあ。まずいの、わかってただけどなあ

「あれ？」

ため息つきながら階段上がって、思わず声が出ちゃった。教室のほうから、声が聞こえてきてる。

——いや、別にそんなに遅いわげじゃないし、誰かいたっておかしくないんだけどさ。でも、この声

「それで、ユリコは平気だったの？」

「へーき、へーき ほのかですいぶん慣れたからね」  
 化学部のメガネの子、ユリコと あっちゃんあ、ほのかだよ。

まいったなあ。教室の目の前でしゃべってんじや、見つからないで入れないよ。ほのかにしちゃ珍しく、きやらきやら話してるし、そう簡単にはどかないよねえ。

「でもあの子、元気あるね。 やっぱ、ほのかは

あゝいうのが好みなの？」

「え？ うーん そう、そうかも、ね♡」

って、好み？ なに？

「な〜にが、『ね♡』よ。化学部はひとり者が多いんですからね。ちよっとは注意しなさいって」

「は〜い」

ゴツツ、って音が頭に響いた。思わず、階段の壁にはりついちゃったんだ。あたし。

でも、それよりもっと大きく声が響いてる。あの子 『あの子』？

いや、うん、その、ええと これって、これってやっぱり、志穂の言ってた通り ！？

\*\*\*\*\*

「ん？」

にこにこ笑ってるほのかの後ろ、廊下の端っこのほうで、なにか動いてる。

見間違いかと思つて、メガネをかけたなおしてみたんだけど やっぱり。階段のどこから、茶色の丸っこいのが出たり入ったり。これ、どう見たって、

「ちよっと、ほのか。あそこにいるのって、美墨さんじゃ ？」

そう言つて指さそうとしたら、腕ごとぐいっ、と下に降るされた。

「ええ、なぎさね」

なぎさね、って。振り向きもしないで、よくわかるよ。あきれるね、ちよっと。

5 もひとつなつやすみ

それにしても、美墨さんもヘンだなあ。階段の影からこっそり覗いてるなんて あ、ジャマしちゃ悪いって思ってたのかな？ 化学部にはズカズカ入ってくるくせに、妙なとこだけ遠慮するもんね。

わたしは、すうつと息すつて、階段に向かって片手をあげた。せえ、のお  
「ユリコ、ちよつと待つて」

呼ぼうとしたところで、またほのかが上げた手にしがみついていた。一瞬だけ階段から目が離れて、また見てみたら あゝあ。

「なにすんのよ、ほのか。もう、階段降りてっちゃったじゃないの」

振り返った目の前で、ほのかがくすくす笑いながら謝ってる。なんか、へんだなあ。

「まあ、いいけど ところでほのか。なんでいきなり、あの子の話なんかし始めたの？」

そうほんと、いきなりだったもんね。無理やり話題変えた、って感じでさ。

つて、あれ？ なんだろ。いま一瞬、びっくり顔になったような

「ううん、ちよつと気になっただけ。ごめんね♡」  
すぐまたくすくす、つて笑うほのかの顔に、ちよつとだけほかん、としちゃった。その顔があんまりにも普通で、だから、わたしはちよつと聞き逃しちゃったんだ。

「もうちよつと、かな？」

そう、すつごく大事な、ほのかのつぶやきを。

\*\*\*\*\*

階段を下まで降りたところで、あたしは動けなくなつた。

（だつてさ、ほのかから男の子の話をって出てこないもんね）

頭の中に、あたしが言った言葉が聞こえてきた。もう4日も前に言った言葉が。

(そうね。でも人間たもの、そのうち興味が出るわ。それから考えてもいいでしょ)

正面の窓からまつすぐ日が差し込んでくる中、ほかの声も聞こえてくる。暑いはずなのに、ちっとも感じないな。

(ほのかに彼氏ができたなら、うちの学校でほっとするの10人じゃきかないよ、きっと)

どこからか、風が吹いてきた。ちよっとほこりっぽくて熱い風が、髪の毛とスカートをやらしめてく。

(なぎさも、ほっとする?)

また聞こえてきたほのかの声に、あたしは思わず口をあけて そのまま閉じた。4日前はすぐに答えられたこと、なんだけど

「なんで、あんなこと言っちゃったんだろううなあ」

言葉がこぼれたのと一緒に力が抜けて、あたしはそのまま、階段の下の段に座り込んだ。じやった。

\*\*\*\*\*

たいへん、たいへん。

授業が終わったあと、ついクラスのお友だちと話しちゃってたら、もうお日さまが傾いちゃってるわ。あかねさん、きっとてんてこ舞いしてるはずよね。早く戻って、せめてタコカフェのあと片付けだけでも あら?

下駄箱のちよっと手前、階段の端っこに、見覚えのある顔が座ってる。あれって

「なぎささん?」

階段に腰かけて、ひぎのうえで頬づえついた頭から、目だけがちょこつと上向いた。

「ああ、ひかりかあ」

なんだろう、はじめてみるわ。なぎささんの、こんなに落ち込んだ顔。ああ、また下向いちゃった

私は思わず駆けよって、ゆかにべたん、と座り込んだ。

お日さまにあたって、まだちょっと熱いゆかが足に触れる。けど、そんなこと気にしてる場合じゃないわ。

「なぎささん!」

私はもう、ゆかに寝転ぶぐらいになって、下からなぎささんの顔を見上げて 息がつまっちゃった。

「な、なんでもないよっ!」

その瞬間、なぎささんはがばっ、と起き上がって、そのまま下駄箱に走っていつちゃっ。

消えてゆく後姿を見ながら、私はゆかの上でしばらく起き上がれなかった。

まだ目の奥に焼きついてる、見上げたなぎささんの目。ゆらゆら揺れて、いまにも、泣き出しちゃいそう。

「ポポ? ひかり、帰らないポポ?」

カバンの中から声が聞こえて、私ははっとした。

帰る そう、帰らなきゃ。あかねさんが ても。

「ポルンは、わかってくれるわよね?」

ちょっとだけ開けたカバンの中で、ちっちゃな顔が笑ってる。私の気持ち、わからないかもしれないけど。それでも、笑ってる。

そうよ。うん、そうしよう。

\*\*\*\*\*

「はあ。なんだって、こんなことになっちゃったのかなあ」

校舎の裏つかわで壁によっかかりながら、あたしは思わず声に出した。思っきり走りこんできたせいで、ちょっとまだ息切れてるけど そんなことより。

「ひかり、気づいちゃったよねえ」

口にしたら、後悔が押し寄せてきた。

ヤっバいなあ ひかりって、結構人のこと気に

する子だもんねえ。ったく、あたしが原因作ってど  
うすんのよ。もう！

「はあ」

空を見上げたら、また息がもれていった。風に乗っ  
て、雲の形がゆっくり変わってく。タマゴみたいな  
形の雲から、まっすぐな細い雲が、すーっと。

なんだか、だんだんどこか見たような形になっ  
てくな。あとはあの上の方に、ハート型のヘアピ  
ンが

「ちがうってばっ!!」

ばっ、と壁から跳ね起きてあちこち見てみたけど、  
だれもいない。ああ、もう！自分の大声に自分で驚  
いちゃうなんて、どうかしてるよ、あたしはっ！

トスン

軽い音がしたと思ったら、いつもよりほこりっぱ  
い土の匂いがやってきた。

ん？ああ。あたし、座り込んだんだ。

まずいよね。制服のスカートのままなのに、よこ  
しちゃってさ。

「でも」

でも、あたしはそついうヤツなんだ。こないだだっ  
て、フェンスよっかかったまま眠っちゃったし。ス  
カート土だらけで、ほこりっぽくて。そんなのはみ  
んなもわかつてる。わかつてくれるはず、だから。

「3日も、かあ」

鼻の奥から、土の匂いが消えた。代わりにきたの  
は、痛みだけ

\*\*\*\*\*

「失礼しますっ」

何度来ても緊張する理科室のとびら。私は思い切っ  
て開けてみた。

そこには、とにかくいま一番話したい人がいるは  
ずだから。

「はい っ、あれ？ ひかりちゃん？」

夕日で紅くなった理科室から、よく通る声といっしょに出てきた顔には、メガネがかかったた。

「あ、あの」

やっぱり、ちよつと緊張する。ユリコさん ほのかさんのお友だちって言っても、私はあまりお話ししたことない人だもの。

「どうしたの？ っ、ひかりちゃんがここに用事なら、ほのかじゃないか。でもごめんね、ほのかってば先に帰っちゃってさ」

「い、いえ！」

言ったとたん、メガネから目があふれちゃうくらい大きくなった。いけない、思わず叫んじゃったけど いいわ、このまま言っちゃおう。

「あの、私ユリコさんに、聞きたいことがあるんですっ！」

ふう。言い切ってからそおつと顔を上げたら、ユリコさんが自分を指さして首をかしげてる。ああ、もっ

とちゃんと説明しなくちゃ

「ええと、その、ほのかさんとなき」

「わ、わたしが、どうかしたの？」

ひいっ！

背中からの声で、私の心臓は止まりそうになっちゃった。

そおつと振り返ったら、ああ、やっぱり。

「ほのか、帰ったんじゃないの？」

ユリコさんも気がつかなかったみたい。いつの間に来てたんだらう？ 気配なんてちよつとも感じなかったのに。

「うん、そのつもりだったのだけど ちよつと、用事ができたから」

ううん、そんなこと考えてる場合じゃないわ。いまは、とにかく。

「そ、それじゃ私、失礼します！」

「あ、ちよ、ちよつと、ひかりちゃん!？」

ユリコさんの声を背中で聞きながら、私は誰もい



ない廊下を走っていった。

\*\*\*\*\*

「あ、ちよ、ちよっと、ひかりちゃん!？」

わたしがろうかき首出したとき、小さな女の子はもう見えなくなっていた。

ふう、つてため息みたいの聞こえた気がして、振り返った先には笑顔のほのか。

「やれやれ、なにしに来たんだろねえ」

「さあ?」

笑顔、なんだよね。わたしの言ったことばに、ほのかのくすくす声が重なってきてる。けど、

なんか、わざとらしい

うん。わたしのカンが教えてくれたよ。

自然と、目つきがジロツって感じになる。そうだよ。さっきだって、いきなりあの子の話し始めちゃ

うし。きょうのほのか、なんかへんだ。なんかおかしい。

「それじゃ、わたしはほんとに帰るわね」

ほのかがカバン持って、理科室から出ようとしてる。それを見た瞬間、わたしはとっさにカバンつかんじやった。

「ちよい待ち、ほのか」

こつちをちらつと見た顔は、笑顔のまんま　いや、だまされるもんか。いま、つかんだカバンがびくつ、としたもん。

「ほのかあ? 正直に言うなら、見逃してあげてもいいんだよ?」

ほら、またびくつとした。もう絶対、間違いないわ。

「な、なに言ってるのよ、ユリ」

「1日!」

最後までなんて、言わせたくないよ。まったく!

「わたしが我慢するのは、1日だけだからね。明日までに元に戻らないと、どうなるか」

ほのかがくちばし尖らせた。言いわけでもしよう、つての？ もう遅いって。思い出したちゃったんだから。へんなのは、きょうからじゃないって。

「あの子、わたしに相談に来たのよ？ ほのかや、美墨さんじゃなくって！」

それがどーゆー意味なのか、わかんないとも思ってる？」

つかんだカバンに力が入る。わたしが手を放すと、ほのかがちよつとだけこつち見てから、そのままろつかを駆けてった。

ほのかの行く先はわかんない。けどわたしはとびらを閉めて、夕日の差し込む理科室の脇の方、ちっちゃなとびらへ歩いていった。

とびらを開けると、実験器具がいっぱい。でもそのなかにひとつ、場違いなものがかかっている。何日前か前に、ほのかに頼まれたものが。わたしはそれを取って、畳んで、片手に抱いた。行くべき場所はお

かっている。あとは、あの子を連れて、と。

「さて、ひかりちゃんの援護に行きますか♡」

\*\*\*\*\*

「どうしよつか、志穂？」

なぎさ抜き練習が終わって教室に行く途中、並んで歩いてた莉奈が声かけてきた。

「え〜とお」

あたしも一応くち開いてみたけど、な〜んにもアイディア出てこないや。

まずいんだよねえ。練習だからだいたいじよぶかな〜、って思ってたんだけど、やっぱりなぎさがいないと違う。今年のラクロス部って、なぎさのチームなんだよね。ほんとにさ。

こーいうとき頼りになるのって言ったたら、ほのかちゃんなんだけど。でも、今回だけは聞けないし

「あとで、ユリコちゃん会いに理科室でも行ってみ

よっか?。」

練習早く終わらせちゃったし、まだ残ってるかもしれないもんね。

あたしは、階段の最後の4段をびよんびよん、と跳んで上がった。角を曲がればすぐ教室。カバン持って、そのまま理科室行けば ってえ!?

「なにになににいっつ!?!」

目の前にいきなり、明るい色のカタマリが飛び込んできたあ!

「きゃっ!?!」

明るい色のカタマリ 髪の毛が、あたしの目の前で急ブレーキかけた。止まりきれなくてぶつかってきたけど、すっごく軽くてぜんぜん平気。はじき飛ばさないように、抱きとめちゃったくらい。

「こあら1年生! っつか走っちゃダメで って、

あれれ? この子 っ」

階段上がってきた莉奈の音が、途中でとまどってた。1年? そっいえば、なんだか見たことある髪

の毛、って、

「ああ、そうそうそう、1年の九条さんだよ。最近なぎさとよく一緒にいる子」

あたしの胸からぱつ、と顔上げた九条さん、ぺこぺこ頭下げてる。まあ、わざとじゃないんだし、怒ることもないよね。

それじゃ、手でも振って、そのまま別れて あ、

あれ? 手が、振れない?

よく見てみたら、あたしの手にながさがしがみついていた。絶対はなれないぞ、っっていう顔で。

「あ、あの! ながささんとほのかさん、なにかあったんですか!?!」

その瞬間、あたしたちは凍りついた。

「えっつ、とお っ」

「うん っ」

莉奈の目、のぞきこんでみたけど、やっぱりダメ。なんとかがまかしてよ、って目が言ってる。でもあたしは、そのまま目を九条さんに移してみた。

本気だよ、これ。興味半分じゃないや。 そうだよ。この子ってここ半年、あのふたりとずっといっしょにいるんだもん。

うん。よあし！

「あのねあのねあのね！」

「志穂、ちよ、ちよっと!？」

莉奈が口ぶさごうとしてるの、あたしは思いっきり振り払った。

「ん、もあ。いいんよ、この子になら。 でねで

ねでね、あたし見ちゃったのよ。3日前、男子部との境目にあるフェンスでさ」

ちよっとだけムツとしてる莉奈に片手でゴメンして、あたしはすうっ、と息吸いながら九条さんの瞳を見た。 うんうんうん、あたしは間違ってるよ。ちゃんと話さなきゃ、この子には。

「ほのかちゃんが、寝てる男子部の子にキスしてたのー!」

\*\*\*\*\*

目の前のフェンスが、少し赤く光りはじめた。

そのずっと向こう、男子部の運動部の子たちが少しづつ、部室に帰ってくよ。あれは、サッカー部かな？

「元気な子、かあ」

あの中に、あの子もいたんだ。もう一年半も前だけどさ。

「ほのか、もう忘れちゃったのかなあ?」

口に出してからしばらくして、あたしは首ふった。そんなわけない。ほのかが、忘れるわけないよ。ひ

かりが来るまでは、背丈が似てる子見つけるたびに立ち止まってたくらいだもんね。

みんな覚えてて。でも、それでも好きになっちゃったんだ。きつと、すっごくいい人見つけたんだよ。そうに決まってる。

けど

「志穂も志穂だよ。3日も経ってから言わなくなつてもさ」

あたしはまた首ふつた。ちがうよ、志穂は悪くない。夏力ゼで2日休んでたんだもん。言えるわけないんだよ。

けど、だけど

「朝、いつしよに学校来て、休み時間にしゃべって、帰りにタコカフェ寄って、家返ってからもちよつと電話して」

それが3日分。それなのに、なにも聞いてない。あたしには、なにも言ってくれなかった。

言つたらあたしがジャマするとも思つたの？

——ちがうよ。そんなこと思うわけない。それじゃ（ほのかに彼氏ができたら、うちの学校でほつとするの10人じゃきかないよ、きつと）

4日前に言つた言葉が頭の中に響いて、あたしの背中に冷たい汗が流れた。まだ日があつて暑いつていうのに。

いっくら好きでも、ほのかがすぐにキスまでするわけない。もっともつと前から好きだったに決まつてる。

なのに夏休み中、あたしはほのかと一緒だった。ずつとずつと、一緒だった。

あたしのこと考えて、一緒にいてくれたんだ。好きな人と、もっと一緒にいたいはずなのに、我慢して！

（——なぎさも、ほつとする？）

「なんて無神経なんだよ！ あたしはっ!!」

ガンッ！

思わず、グーでなぐつた頭がくらくらする。——だめだ、もう限界。これ以上考えたら、ほんとに死んじゃう。

「ちよつとだけ、寝よう」

あたしは立ち上がって、男子部との境目のフェンスまで歩いていった。この前みつけたんだ。ちよつ

とたるんだとこ、針金が細くてやわらかいとこがあるの。こつやつてよつかかって、目をつぶればちよつとしたベッド。だから

(——なぎさも、ほつとする?)

「もう許してよ。ほのかあ」

\*\*\*\*\*

「はっ、はっ、はっ」

一所懸命な息づかいが聞こえてくる中、あたしは走つた。教室から階段おりて、上履きのまままで昇降口から校庭へ。

ずっと、ちつちやな手に引つ張られながら。

「ねえねえねえ、そんな走んなくても」

つて、手の先に向かつて言つてはみたけど、

「いいつ、えっ！ なつ、なぎつ、なぎさつ、さんつ、がっ!!」

ちよつとだけ、こつち向いた九条さんの顔見たら、それ以上言えないよ。

息きらして、足もつれさせて、それでもとにかく走つてくんどもん。 あゝ、もう！ 愛されてるなあ、なぎさつてばさ。

「それで、志穂が見た、つてのはどのへんなの?」

となりから、莉奈のへーきな声が来る。そうなんだよね。ほのかちゃんキスしてるとこ見た、つて言つたら、とたんに『その場所に連れてつてください』つて手を引つ張つてきたんどもん。 あたしの手だけ。なんか莉奈、楽すぎな気がするなあ。

「志いゝ穂?」

はいはいはい。わかりましたよ。

九条さんは、校舎の角をお構いなしに曲がつてく。あたしはぶつからないようにちよつと走りながら顔を上げて、

「奥のフェンスだよ。そうそうそう、こつやつて校

舍ぐるつと回つた先の えええっつ!!?」

その先にいたもの見て、あたしは思わず足止めて  
大声上げちゃった。

「きゃあつ!」

九奈さんの叫び声と、なにか転んだみたいな音、遠くから聞こえる気がする けど、あたしはそんなの気にしてられなかった。

だつてだつてだつて、あれ、3日前と同じ! 寝てる場所も、背も、寝てるかんじも ほかの子だなんて、ありえないっ!!

「あの子だよ! ああのフェンスで寝てる子! ほのかちゃんが、キスしてたの!!」

\*\*\*\*\*

つむつた目のまえが、急に暗くなった。

近くでなにか、気配がする。

「えーっ、とお」

よく聞く声が、すぐ近くから。

「えとえとえとお」

いつもの声も、近くから。

「あのお これつて、なぎさ、さん ?」

ちよつと戸惑つたみたいな声も、いつものだ。

あ、ほら。あんま近くによると、みつあみが当たつてくすぐつたいつて ええっ!?

「ひ、ひかり!」

飛び起きたあたしのまわりを、みんなが囲んでた。

ひかりに 莉奈に、志穂。なんか、変な組み合わせだけど ??

「志穂? これ、ほんと?」

莉奈は『これ』とか言つてあたし指さしてるし、

「んと、んと、んとね? 多分、そう」

志穂はあたしと目も合わさないし、

「それじゃ!」

でもつて、ひかりだけ目をキラキラさせて ひ

とが落ち込んでるつてのに、なによ、いつたい?

「ほら、志穂……」

莉奈が志穂の後ろに行ったと思つたら、いきなり志穂があたしに向かって跳んできた。

「うわわわわっ……」

なんとか両肩つかまえたけど、志穂が目の前どアツブだよ。なあにやっつてんだろ

「えとえとえと　なぎさ、怒らないですよ？」

ん？　すぐ離れるかと思つたのに、志穂があたしの腕つかんで、シャツのすそ、ちょこちょこいじつてる。なんか言いにくいことでもあんの？　って、

うわ！　いきなりまたどアツブ!!

「あたしが見た、ほのかちゃんの相手って　」

へ？

あたしは一瞬、ぼかん、としてたと思う。

目のすぐ前に、志穂の指。それが、まっすぐこつちをさしてる。　って、ちよつと、待って、よ？

「あた　し??」

すっつ、と志穂の指が引つ込んでくの見えて、思わず

腕ごとつかんだ。

「あたしい!!」

ぶんぶん腕ふってるけど、逃がすもんか！　な、なにをいまさらっ……

「ったく、なんで間違えたんだろっね、志穂ったらさ。

だいたいこつて女子部の側じゃない。フェンスがやわからいって言っても破れるほどじゃないし、男の子が寝てるわけ　」

「だつてだつてだつて、男子部の制服かぶつてたんだもん！　絶対絶対絶対、男子部の冬の上着で

あれ？　冬服??」

言ってる途中で、志穂の目が空見上げた。あたしが、男子部の冬服着てた？　なにそれ??

「それって、こんなのじゃなかった？」

あ？

声のした方に制服が見えた。男子部の、冬服のがばっ、と頭を上げたところに、メガネの顔があった。



「やっぱりね。ほのかに頼まれて、知り合いの男子部を持ってきたんだけど」

化学部のユリコが、なんでここに??

「どうしてここがわかったんですか?」

ひかりも、まんまるな目で見つめてる。そうだよ、こっつて偶然通りかかるようなとこじゃないのに。

「久保田さんに聞いたの。美墨さんはときどきこっつで寝てるって。で、それをほのかに教えたのもわたしよ」

制服を腕にかかえながら、ユリコが言ってる。

あたしは、志穂の腕を支えにして立ち上がった。スカートのおしりを叩いてると、ひかりの声が聞こえてきた。

「えっと どういうことなんですか??」

「んーと、思いっきり簡単にいうとねえ」

あ、ユリコの目、なんか笑ってるよ。たくらんでる時のほのかみたいに。

「偶然美墨さんがフェンスで寝てるのを通りかかっ

たほのかが、偶然男子部の制服持ってて、思わず制服かけてキスしてるところを偶然久保田さんに見られて、でもって美墨さんが起きる前に制服持って立ち去った、と。

偶然、久保田さんが立ち去ったあとに、ね」

うっわぁ みんな一斉に困った顔になったよ。あのひかりまで。

でも、へんだな?」

「なら、あのろっつかで話してたのはなんだったのよ。

元気がある子が好きとか」

「はい、『元気な子』」

あたしが言い終わる前に、待ってました、って感じでなにか出てきた。片手で持てる、プラスチックの透明な箱が。

箱の中では、白と薄茶色が動いている。番人くらいの大きさで、でもしっぽが長くて、ちょこまか。

「ね、ねずみ??」

「そ。数日前から、化学部で飼ってるの。ほのかに

ぱっかり懐いちゃってるけどね。

さあて、美墨さん。心当たりはないの？ ほのかが、これだけ凝ったことするなんてこと、そうそうないわよ？」

ユリコの目が、すっごくいじわるになってる。みんなの視線もあたしに集まってきた、思わずフェンスまで下がっちゃったよ。でも、心当たり、って言われてもね

「どうしちゃったんでしょう、ほのかさん。夏休み中はこんなことなかったのに」

ぱつ、て勝手に顔が上むいた。

その先に、ひかりの顔があつたはず。でもそのとき、あたしはそんなの覚えてなかった。

なんかひつかかった。いま確かに、なんかひつかかったんだ。夏？ 夏休み ??

(夏休みがもうひとつあればいいのになあ——)

「思い だしたっ！」

言葉がこぼれた瞬間に、あたしは駆け出してた。

\*\*\*\*\*

「え？ あ、あの、なぎささんっ——!!」

びっくりした顔で走り出そうとするひかりちゃんの肩を、わたしは両手でおさえた。

目線の先では、駆け出してつた美墨さんがだんだん小さくなって、校舎の向こう側に消えてく。

すっかり見えなくなつてから、ひかりちゃんがこつちへ振り向いた。赤い夕日の中に見える、ちよつとくちばし尖らせた顔。なんだか苦笑いが出ちゃうな。

「だいじょぶだいじょぶだいじょぶ 動き出したら、なぎさは無敵だもん」

久保田さんの言葉で、ちよつとだけほつとした顔になった。助かるなあ。わたしじゃこつちはいかないもんね。

「ま、とりあえずは明日ね」

高清水さんが、両手を頭の後ろで組みながら、昇  
降口に歩いていく。

「そうそうそう、明日、明日」

久保田さんも、跳ねるみたいにそのあとついていく。

「明日　??」

ひかりちゃんが見上げてきた。首かしげた顔が純  
真すぎて、わたしは思わず前向かせちゃったよ。

「ん。明日、ね」

そのままわたしは、ひかりちゃんの背中を押しな  
がら歩き出した。下を見たら、上履きのままの細い  
足。何も考えずに飛び出してきた、足　さあ、こ  
れで明日、ふたりが元に戻ってなかったらどうして  
やるうかしら。

「覚悟なさいよ、ほのか♡」

手首にかけたハムスターのカゴが怯えたみたいに  
震えたのは、とりあえず無視することにした。

\*\*\*\*\*

(夏休みがもひとつあればいいのになあ　)

ほのかン家の近くの駅についてから、あたしは走っ  
てた。

そうだよ。なんで忘れてたんだろ？　最初に言い  
出したのは、あたしだったじゃない。

(もつと長く、じゃなくて?)

(そうそう。宿題はしかたないけどさ。それと別に、  
ただずーっと遊ぶ夏休みがあるよねー)

大きな柿の木を曲がって、坂を上がると、遠くか  
らでもすぐわかる、ほのかン家の塀が見える。

そうだった。ほのかはくすくす笑ってたっけ。あ  
たしらしい、なんて言ってさ。

(　　) そうね。わたしも、欲しいかも。みんなと一  
緒の夏休みだけじゃなくて、もつとゆっくりな夏休  
みもね)

(んー、これで男の子と一緒に夏休み、つてのが出

れば、色気もあるんだけどなあー)

塀の端っこから門まで、あたしは思いつきり地面を蹴って走った。

門はちよつとだけ開いてる　まるで、あたしが来るのわかつてるみたいに。

(なによ、それ?)

(だってさ、ほのかから男の子の話って出てこないもんね　)

「お邪魔しますっ!」

庭で水まいてるおばあちゃんに声だけかけて、あたしはそのまま走りこんだ。

庭の隅から出てきた忠太郎を、ステップでよけながら。

その先には　ほら、待ってるよ、こいつは。緑側に腰掛けてさ!

「ほ〜のお〜かあ〜っ!!」

あ、来た来た、なんて顔してっ!

(彼氏ができたら　なぎさも、ほっとする?)

ほのかの体、あたしは腕ごと抱きついて、

「あ、なぎさ　え?」

それから、ぎゅーっと抱きしめた。全力で。

「あいたっ! 痛、痛い痛いっ!」

(そりゃ、友だちだもん。ちよつとはほっとするって。応援するよ　)

そう。あのとき、軽くそう言ったんだ。あたしは

なんにもためらわずに、そう言えたんだよ。あのときは。

なんにも知らないから。ホントにそうなるなんて、考えてもみなかったから。

でも、いまならわかる。あたしの中の、本当の答え。

「前言撤回! これがホントの、あたしの答えよ! 文句ある!?!」

もう一度、あたしは目をつぶった。

ほのかの背中に回した両方の手首をつかんで、手

首に爪が食い込むくらい、全力でぎゅッ!!! で  
も、痛そうな声は、もう聞こえなかった。

ほんのちよつとだけ目を開けてみたら、目の前に  
すつこく痛そうな笑顔が輝いてる。

きっとあたしも、同じ顔してるはず。おんなじだ  
け痛みもらつて、それでも笑った顔見せて

その瞬間、ほのかがいきなり、ぷっ、って吹き出  
した。

「ん。痛い痛い♡」

痛そうな顔と軽い声。目の前がなんだかまぶしく  
見えちゃうよ。

夏休みもひとつぶんくらい、ね。

—おしまい—